



## 香港便り その38

### 香

港には日系スーパーマーケットがあり、このアジアのメガシティには約2万人弱の日本人が住んでいる。僕が所属する香港バレエにも現在7人の日本人ダンサーが在籍していて、日本語で会話するのはもちろん、フォロワーしているYoutuuberのことで盛り上がるなど、まるで日本で生活しているかのようなようだ。

それでも、日本に帰国すると、毎回トレンドに乗り遅れている自分を発見し、エイリアンになったかのように周りの空気感を捉えられないことも多々ある。日本文化を敬愛し、日本人としての誇りを持って生きていると自覚している反面、日本の友人などから日本人らしくないと揶揄されてしまうのは何処か歯痒い。確かに日本には隠れたソーシャルコード（しきたりやマナーなど）が多く存在し、それは社会に揉まれながら学んでいくものだ。日本で社会人経験をしていない僕には欠如しているかもしれない。それ以上に影響が大きいのは僕が日本のマスメディアに触れてきていないということが大きいのではないだろうか。

海外に住んでいると日本のニュースの多くを海外のニュース媒体で最初と知ることが多い。特に中国語を母語と

しない香港の駐在員コミュニティの中のニュースアウトレットは英語のものが一般的だ。例えば夏の段階で英国の高級雑誌、『エコノミスト』が次期首相の有力候補として上川外相（2024年9月時点）のことを取り上げていた。僕は香港の友人らにそのことを触れ回っていた。ところが日本では全く違った報道がなされていたようだ。僕らが見るYoutuubeのラインナップだつてアルゴリズムが働き、見そうな番組しか出てこない。いつてみれば良くも悪くも自然と目にするニュースやメディアには何らかのバイアスがかかっているのだ。おそらく『エコノミスト』的価値観に基づくと上川外相が最適だとなつて、それは日本のマス（大衆）の声を反映したわけではなかったのだろう。プロバガンダは北朝鮮やロシアの専売特許ではないのだ。アメリカやヨーロッパ、そして日本の報道にさえ、一定の政治的ポリシーに基づいた視点からの報道というものがある。そして僕らはどのプロバガンダを許容できるかによって決まるバブル的コミュニティに属し、全体的な認識というのを作り上げていく。

「そういえば僕の叔父が返還前後の香港に商社の駐在員として滞在していた

時、祖母がいつも日本のテレビ番組を録画して送っていた。ザ・サラリーマンである商社員だった彼は日本人らしくないと揶揄されなかっただろうが、それでもその後アメリカの会社に活躍の場を求めた。

メディアの選択、もしくは気づかぬうちにメディアに晒されることで、全体的認識、日本語で言うところの空気を共有していくのなら、同じように人格形成期である10代から海外に出た日本人ダンサーたちと香港バレエバトルを作り出しているのかもしれない。

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

### Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

